

## 言語学

### アニマシー

生きている程度である。アニマシーは物理的なものではなく心理的なものなので、時代や地域によって大きく違う部分もある。

### ヴォイス（態）

前景－背景に応じて言語表現が変わるパターンのことである。代表的なヴォイスとしては、能動ヴォイス（能動態）・受動ヴォイス（受動態）・使役ヴォイス（使役態）がある。

### エンパシー（共感度）

身内度のことである。「あげる」と「くれる」の使い分けには、エンパシーが関わっている。

### ダイクシス（直示性）

発話現場を基準として物事を表現するという、言葉の性質のことである。指示詞の使い分けなどには、ダイクシスが特に強く関わることもある。

## 証拠性

自己や他者の心がはっきり分かる程度のことである。人称制限と呼ばれることのある現象には、証拠性が関わっている。

スキーマ＝認知枠＝フレーム＝スクリプト

物理的なレベル、機械にかけて測ってみることのできるレベルをエティックなレベルと呼ぶ。反対に心理的なレベル、機械にかけて測れないレベルをイーミックなレベルと呼ぶ。

/a/i/u/e/o/ このスキーマを「音素」といい、具体的で物理的つまりエティックな「音声」と区別する。

ソシュールによれば、記号とは意味と形式の合体物ということになる。

意味＝所記、シニフィエ

形式＝能記、シニフィアン

「文法」には最低3つの意味がある。

「機能」には最低5つの意味がある。

#### 系統論

歴史的に見た場合、ある言語がどの系統に属するかという分類方法。一つの祖語から別れた言語のグループを語族と言い、ヨーロッパの主要言語やペルシャ語・ヒンディー語などの属するインド・ヨーロッパ語族、中国語・チベット語・タイ語・ビルマ語などが属するシナ・チベット語族、モンゴル語・トルコ語などが含まれるアルタイ語族などがある。日本語や韓国・朝鮮語はアルタイ語と関係があると思われるが、証明されていない。

#### 類型論

歴史的な系統は問わずに、文法的な機能や音韻・形態などを見て分ける分類方法。文法に着目して分類すると、別項の屈折語、膠着（こうちやく）語、孤立語のほか、イヌイットなどいわゆるエスキモーの言語のように文を構成する要素すべてが動詞を中心に密接に結合して1文を1語で表す抱合語がある。

#### 屈折語

語尾変化などの語形変化によって、語の文中での役割を表す言語。ドイツ語、ロシア語など。

#### 膠着語

単語や語幹に文法的な機能を持つ要素が次々に結合していく言語。日本語、韓国・朝鮮語、モンゴル語、トルコ語など。

#### 孤立語

文の中で単語が屈折や膠着なしに使われ、文法的機能は語順などで表される言語。中国語、タイ語、ビルマ語、ベトナム語など。

古典的類型論では、言語を、系統は問わずに、主に語の文法的な機能によって分類する。語や語幹に文法的機能を持つ要素が次々に結合するのが膠着（こうちやく）語で、日本語、朝鮮語（韓国語）、モンゴル語、ハンガリー語など。語形変化で文法を表すのが屈折語で、ドイツ語、フランス語など。語が形態変化せず語順などで文法を示すのが孤立語で、中国

語、ベトナム語、ビルマ語、チベット語など。膠着語のうち、イヌイットの言語などは、文を構成する要素が動詞の前後に付加されて文が1語のようになり、抱合語と呼ばれる。

中国語や、朝鮮語では、子音のうち、息を激しく出す有気音と、息を押さえて出す無気音を区別する。日本語では有気音—無気音は区別せず、声帯の振動する有声音と振動しない無声音を区別する。中国語や朝鮮語では、区別しない。無声音は日本語では、カ、サ、タ、ハ、パ行の子音で、有声音のガ、ザ、ダ、バ行の音とは違う音となる。

文法について考える

- ①「事実」と「解釈」を区別すること
- ②先入観にとらわれずに事実在即して考えること
- ③一步踏み込んで考えること

見るのが好き

この「の」は準体助詞とか名詞化辞などと呼ばれる。

何が格助詞を決めるのか？

1. 動詞によって決まる場合

[人]が[物]を見る

[人]が[物]へ行く

[物]が見つかる

[人]が[物]を見つける。

2. 前に来る名詞によって決まる場合

「来年」「先月」「きのう」・・・「に」をつけない

「1990年」「9月」「30日」・・・「に」をつける

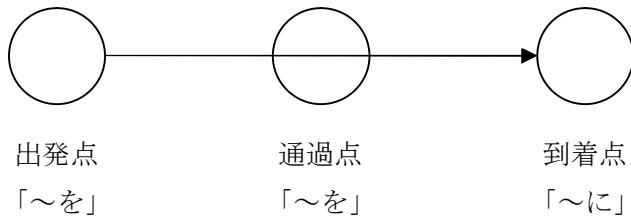
移動の動詞につく「場所を」と「場所に」

「[場所]を」と「[場所]に」が表すもの

[場所] を 出る、離れる、去る、卒業する・・・出発点

[場所] を 歩く、登る、渡る、通る・・・通過点

[場所] に 入る、着く、行く、入学する・・・到着点



移動の動詞を分類すると

「[出発点]を」をとる動詞

離れる、卒業する、・・・

出る、去る、・・・(「[到着点]に」をとることがある)

「[通過点]を」をとる動詞

通る、通過する、・・・

登る、渡る、・・・(「[到着点]に」をとることがある)

「[到着点]に」をとる動詞

着く、入学する、・・・

入る、行く、・・・(「[出発点]から」をとることがある)

「場所 に」と「場所 で」

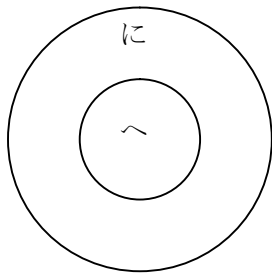
動詞の種類	例	[場所] に	[場所] で
存在を表す動詞	ある、いる、・・・	主体「～が」の存在場所	×
移動を表す自動詞	行く、集まる、・・・	主体「～が」の到着点	(主体「～が」の動作の場所)
移動を表す他動詞	捨てる、送る、・・・	対象「～を」の到着点	(主体「～が」の動作の場所)
そのほかの動詞	食べる、言う、・・・	×	主体「～が」の動作の場所

「人 と」と「人 に」

動詞の種類	例	[人]と	[人]に
相手といっしょにする動作	結婚する、離婚する、 けんかする	○	×
「いっしょに」と 「一方的に」の両方	話す、相談する、会う、ぶつかる	○	○
相手に対して 一方的にする動作	ほれる、はなしかける、 あげる、教える	×	○

相手に対して 一方的にされる動作	(ほれられる)、(話しかけられる)、 もらう、教わる	×	○
---------------------	-------------------------------	---	---

格助詞「へ」と「に」



「へ」から「に」置き換えはできるが、逆はだめ。

「～は」(「AはB」のときAとBの間が近ければ読みやすい文章になる。)

- ・ 話題として一つのことを設定する。「主題」の提示。

「山田君はビデオにうずもれて暮らしている。」

- ・ 対比の「は」

「山田さんは碁は打つが将棋は指さない」

- ・ 限定の「は」

「10まではだめです。」「四時からは開いています。」

「は」は自分の上に来ること(もの)を、とにかく一つ選択して、「これは確かなこと(もの)だ、他とは違う」と取り立てること。

- ・ 「は」は、事柄・事実が確かだというのではなく、問題として確かだということです。「再審」

「花子は美しくは見えた。」(「美しく」と判断して、「は」でまたそれをもう一回問題として確定してから、その後でそれに対して「見えた」という新しい情報を与える。)

4つ「話の場の設定(答えが来ると予約)」、「対比」、「限度」、「再審」の共通点は、「は」は、すぐ上にあることを「他と区別して確定したこと(もの)として問題とする」ということ。

「が」

- ・「が」は直上の名詞と下にくる名詞とをくっつけて、ひとかたまりの観念にします。
- ・現象文を作る。(現象を表す。)例：花が咲いていた。「が」の上のものやことは新しく気づいた対象であり、発見であり、新知識の対象だと扱う。

逆説、あるいは留保条件の「が」

判断の本体は「が」の下にくる

「が」で長くするのはよくない。接続詞の「しかし」で区切る。

三上文法

「Xは」を「題」、「Xは」を「主格」

「Xは」は「題」、残りは解説になる。

「Xは」があるのが有題文、ないのが無題文。有題文では、題の後ろに点(、)が付くのが普通です。

無題文の中のあるフレーズを取り出して題にすることを、提題と言います。

「する」や「ある」は代動詞と呼ばれる。

日本語の文も、主格型と位格型に分けることができる。

## 敬語の基本

「話しかける相手」と「話の中身」とを区別する

- ① 会話ならば「話しかける相手」、手紙や文章ならば、「書き手が心に描いている読み手」がいます。
- ② 実際に話したり、書いたりする「話の中身」があります。

### A 登場する二人称・三人称の扱い

(1) その人物をどう扱うか (2) その人がする動作をどう扱うか

### B 自分や自分の側の扱い

## 尊敬語

基本「お～になる」

食べる→召し上がる

来る、行く、いる→いらっしゃる・おいでになる

見る→ご覧になる

言う→おっしゃる

受け身ともとれる尊敬文は避ける。

謙譲語 「話の中身」に登場させる自分や自分の側でする動作を低めていう表現。

～する→～いたします

～にいる→～しております

～と思う→～と存じます

～知らない→～存じません

～という→～と申します

聞いた→うかがった

行く→うかがう・参上する・参ります

来る→参ります

見る→拝見する

植えている→植えております

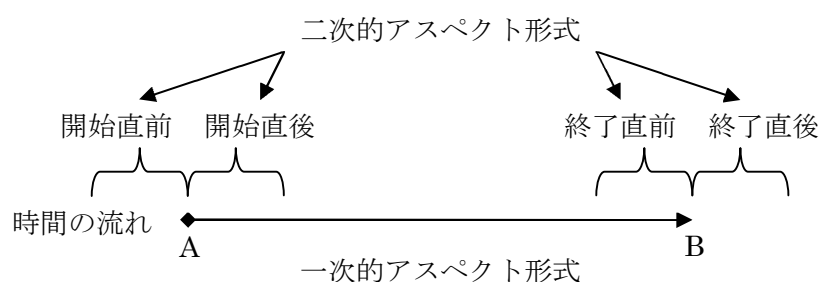
知っている→存じております

学問は「真理」が求められなければなりません。

「名詞＋助詞」を名詞群、「動詞＋その後続くいろんな単語」を動詞群とする。

動詞群の構造は「動詞句（命題核を表す部分）＋ムード（話し手の判断を表す部分）」

動詞句は「動詞＋使役の助動詞＋受身の助動詞＋二次アスペクト＋一次アスペクト＋時制形」



ムードは「推量の助動詞＋終助詞」

動詞句を「[主体=X、対象=Y・・・] 局面、相値、時値」とする。

局面は「かける」とか「始める」みたいな二次的アスペクト形式

相値は一次的アスペクトが表すような内容のこと

時値は「過去」「現在」「未来」

使役や受身を表す単語が、時制やアスペクトを表す単語の前に来なければならないというのを、この無矛盾の原則から一応説明できる。

「モダリティー」は「ムード」が表す内容のこと。現実にかかる可能性のいろんな程度のこと。

「モダリティー」のうちで「確実に起こるぞ」という内容、つまり「必然性」を表す日本語として、「はずだ」と「に違いない」の二つがある。英語の **must** しかし「はずだ」と「に違いない」は意味に違いがある。「はずだ」には因果関係が含まれている。

五段活用（ア段からオ段にかけて変化する）

未然 連用 終止 連体 假定 命令

	A 変化しない部分	B 規則的に変化する部分	C 後ろにつく要素
帰らせる	かえ	ら	せる。
帰ります	かえ	り	ます。
帰る	かえ	る。	
帰れ	かえ	れ。	
帰ろう	かえ	ろ	う。

一段活用（イ段、エ段が一定して現れる）

	A 変化しない部分	B 規則的に変化する部分	C 後ろにつく要素
変えさせる	か	え	させる。
変えます	か	え	ます。
変える	か	え	る。
変えろ	か	え	ろ。
変えよう	か	え	よう。

これだと「る。」「ろ。」が後ろにつく要素となってしまう。

一段活用（修正）

	A 変化しない部分	B 規則的に変化する部分	C 後ろにつく要素
変えさせる	か	え	させる。
変えます	か	え	ます。
変える	か	える。	
変えろ	か	えろ。	
変えよう	か	え	よう。

問題点がある。

「着る」を変化させてみる

一段活用

	A 変化しない部分	B 規則的に変化する部分	C 後ろにつく要素
着させる		き	させる。
着ます		き	ます。
着る		きる。	
着ろ		きろ。	
着よう		き	よう。

変化しない部分がなくなってしまう。

五段活用では、A列は「変化しない部分」、B列は「規則的に変化する部分」というふうにはっきりと違うが、一段活用のB列は「イ段、エ段が一定して現れつつ、規則的に変化する」という、いかにも中途半端になる。

問題が生ずるのは、「五段活用／一段活用」の理論的基盤が「変化の中に五十音図の構図を見る」ことにあるから。

次に「変化しない部分」に基盤を置いたまとめ方をする。

子音語幹／母音語幹

	帰る	書く	変える	起きる
基本形	かえる kaer-u	かく kak-u	かえる kae-ru	おきる oki-ru
使役形	かえらせる kaer-aseru	かかせる kak-aseru	かえさせる kae-saseru	おきさせる oki-saseru
丁寧形	かえります kaer-imasu	かきます kak-imasu	かえます kae-masu	おきます oki-masu
命令形	かえれ kaer-e	かけ kak-e	かえろ kae-ro	おきろ oki-ro
意向形	かえろう kaer-oo	かこう kak-oo	かえよう kae-yoo	おきよう oki-yoo
語幹	kaer	kak	kae	oki
	子音語幹		母音語幹	

	五段活用	一段活用
--	------	------

	子音語幹	母音語幹
基本形	子音語幹 <u>-u</u>	母音語幹 <u>-ru</u>
使役形	子音語幹 <u>-aseru</u>	母音語幹 <u>-saseru</u>
丁寧形	子音語幹 <u>-imasu</u>	母音語幹 <u>-masu</u>
命令形	子音語幹 <u>-e</u>	母音語幹 <u>-ro</u>
意向形	子音語幹 <u>-oo</u>	母音語幹 <u>-yoo</u>

語幹の後ろの部分は次の二つのタイプに分かれる。

- I それ自体変化しないもの：基本形の-(r)u、命令の-e/ro、意向の-(y)oo など
- II それ自体変化するもの：使役の-(s)aseru、丁寧の-(i)masu など。

IIは変化する。

	-aseru	-saseru
基本形	kir-ase-ru	ki-sase-ru
丁寧形	kir-ase-masu	ki-sase-masu
命令形	kir-ase-ro	ki-sase-ro
意向形	kir-ase-yoo	ki-sase-yoo
過去形	kir-ase-ta	ki-sase-ta

単独では使えないという以外は動詞と同じ性質を持つ -(s)aseru、-(i)masu のような要素は**動詞的接辞**と呼ばれる。

ボイス (態)

受動態や使役態

受動文の種類

直接受動文：能動文の「～を」が受動文の「～が」になるというように、能動文と直接対応するもの。

シマウマはライオンに襲われた。(ライオンはシマウマを襲った。)

間接受動文：能動文と直接対応しないもの。対応するとしても、能動文の「～の～を」の

「～の」が受動文の「～が」になるというように間接的なもの。

シマウマはハンターに足を銃で撃たれた。(ハンターはシマウマの足を銃で撃った。)

### 動作主のマーカ―

基本的には→「～に」を使う(「弟はやくぎに殺された。」)

- ・ 「作る」「建設する」など、なにかを作り出すような意味の動詞の場合

→「～によって」を使う(「この機械は中学生によって作られた。」)

- ・ 「言う」「送る」など、なんらの移動の意味をふくむ動詞の場合

→「～から」も使える(「そいつは同業者にいやみを言われた。」「そいつは同業者からいやみを言われた。」)

### 受動文の機能

- ・ 動作主が表されない受動文：動作主がわからなかったり、動作主を言いたくない場合に使う(「また自転車が盗まれた。」)
- ・ 主文と従属節の主語を一致させるために使う(「課長は社長に呼ばれて、いま社長室に行っています。」)

### 使役文

使役文にできるのは：原則として、もとの文の主語が人のとき

被使役者のマーカ―は：原則として、もとの文に「～を」があれば、「～に」に、なければ、「～を」になる。

	「～たい」「うれしい」		「～がっている」「～ようだ」	
	平叙文	質問文	平叙文	質問文
1人称	○	▲	×	▲
2人称	▲	○	▲	×
3人称	×	×	○	△

▲：一般の平叙文・質問文でも不自然になりやすいもの。

△：「～がっかりしている」などは質問文になるが、「～ようだ」などは質問文にならない

「あげる」「くれる」「もらう」

「あげる」 私が → ○に ～を あげる

「くれる」 ○が → 私に ～を くれる

「もらう」 私が ← ○に ～を もらう

主文のテンス

動詞のタ形 → 過去を表す

動詞のル形 → ①「行く」「書く」などを動作を表す動詞 → 未来を表す

②「ある」「できる」「思う」など、存在・能力・思考などを表す動詞 →

現在を表す

動詞は、いわゆる「現在形」が現在のことを表せません。今、目の前の、現在起こっていることを表すのに、動詞の最も基本的な形がふつうは使えないということです。

「いる」「見える」「思う」など、「～ている」の形を取らずに現在の状態を表す動詞を、状態動詞と呼ぶ。「今うちにいる」「明日もここにいる」のように、ル形で現在と未来を表す。そのほかの「話す」「行く」「歌う」など大半の動詞は運動動詞で、ル形が未来だけを表し、「電話で話している」のように現在を表すには「～ている」の形を使う。

「電話で話している」のように「～ている」の形が進行の状態を表しているのが動作動詞、「いすに座っている」のように「～ている」の形で結果の状態を表すのが変化動詞。「～る」と「～た」の間に「～ている」の状態が来るのが動作動詞、「～る」と「～た」の後に「～ている」の状態が来るのが変化動詞である。

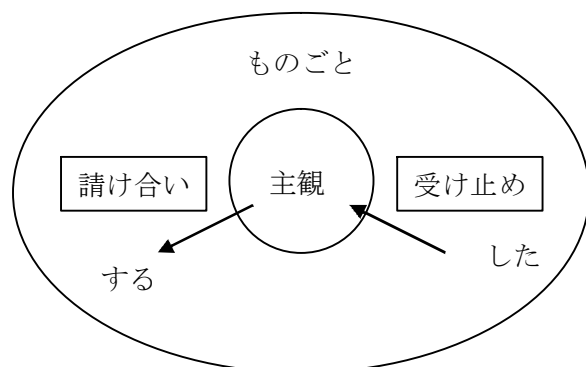
「話す → 〈話している〉 → 話した」(動作動詞)

「座る → 座った → 〈座っている〉」(変化動詞)

動作動詞は継続動詞とも、変化動詞は瞬間動詞・結果動詞とも呼ばれる。

「～ている」の形は、動作動詞では進行の状態、変化動詞では結果の状態を表すのが基本。そのほか「水泳教室に通っている」など習慣や反復を表す用法、「屋根の先がとがっている」といった形容詞的用法、「その話は一度聞いている」などの経験を表す用法などもある。

真説 日本語文法から



擬音語・擬態語→オノマトペ onomatopoeia

擬態表現に共通してみられるのは、それが視覚や触覚の感性を通して自己の身体図式や自己意識に根ざしていることである。

#### 参考書

- 『日本語のしくみがわかる本』町田健著 研究社出版
- 『日本語文法のしくみ』町田健編、井上優著 研究社出版
- 『はじめての人の日本語文法』野田尚史著 くろしお出版
- 『日本語練習帳』大野晋著 岩波新書
- 『日本語学を学ぶ人のために』玉村文郎編 世界思想社
- 『日本語基礎講座 一三上文法入門』山崎紀美子 ちくま新書
- 『角川 国語辞典』角川書店
- 『24 週日本語文法ツアー』益岡隆志著 くろしお出版
- 『』

#### 参考 HP

- 『真説 日本語文法』 <http://jomon.net/morp/morp.html>
- 『庭 三郎 の 現代日本語文法概説』 <http://www.geocities.jp/niwasaburoo/>
- 『ALC 日本語』 <http://www.alc.co.jp/jpn/index.html>

『』

『』